
反復する時間

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反復する時間

【Nコード】

N9328G

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

晴れ渡る空、活気に満ちた体育大会。その中で海斗は複雑な思いが入り乱れ、憂鬱そのものであった。

晴れ渡る青い空。雲は出ているものの、太陽をさまたげるほどのものではない。

風はさわやかで、地を蹴り音を立てて目の前を走り過ぎていく、体操服の群れ。そこかしこから元気いっぱい歓声が響きわたっている。

中学初の運動会。いや、中学にあがったら体育大会と銘打たれた大会に、海斗は皆と同じように騒ぐ気にはなれなかった。

「海斗、何してるの？ 次は徒競走よ、葉と競争するんでしょ。負けたほうが帰りにアイスだからね」

つまらなそうに座っていた海斗の頭をこづきながら、白いハチマキをした桜がのぞきこんでくる。ドキリと胸が鳴ったが、どうせ聞こえないんだからと、海斗はため息をついた。

前髪を触らなかったことを考えて、ふてくされたため息ではないと判断した桜は、不思議そうな顔をする。

「どうしたの、日射病？ 熱中症？ 先生に言ってきてあげようか」
「いいいやいや、大丈夫だって！ ちょっと考え事してただけだからさ」

「考え事？ 体育大会のまっただ中で？」

目を丸くしてくる桜に、海斗は笑って見せた。いや、正しくは複雑過ぎて半笑いになってしまった。

でも長い三つ編みを横に揺らして首をかしげただけで、つつこんでこなかったのは幸いだったかもしれない。

もう一度だけため息をついて、海斗は立ち上がり、首にさげていたハチマキを頭に巻き直した。

葉に負ける事が確実な徒競走のために。

*

——海斗が悩んでいる事の発端は、三日前の出来事だった。

先輩たちが生徒会のため、将棋部は早々に解散し、夕焼けに赤く染まった自分の教室で、写真を撮りに行った葉と真樹を一人待っていた。

暇つぶしに折りたたみの将棋盤を広げて、新聞に載っていた詰め将棋を盤の上で考えている時、男子生徒が飛び込んでくる。

海斗は、目を丸くして彼を見つめた。同じクラスの渡会だったのだが、彼は涙を流していたのだ。

声をかけたらいいものか悩んでいたら、タイミングを見事に失って、見つめるだけにとどまる。

だれもいないと思っていたのだろう渡会は、隠すでもなく驚いた顔でまっすぐ海斗を見た。

「……何だよ、何見てんだよ!」

「え、いや何かあったのか? 大丈夫か?」

少しずつ暗くなっていく教室で、渡会が涙を拭きもせずに、にらみつけてくる。

「大丈夫? ああ見た目は大丈夫だろうよ!」

悪意をぶつけられて、海斗は息をのむ。

同級生で、同じクラスで。少しつり目の悪ぶった話し方をする渡会は、海斗や葉と同じ小学校出身ではなく、お互いに話す事はあまりない。

そんなにしゃべった事ないはずの人間から、突然のケンカ腰。

何も返事が出来ず、ただ黙っていたら、今度はあざ笑うかのように声をあげて笑い始めた。

「鈴木はいいよなあ、考えなしで。日下にふられてるクセに、のうのと友達気分だよー」

痛いところを、ついてくる。

さすがに口を真一文字にむすんで、海斗は不機嫌さをあらわにした。

だが、そんな顔すら渡会にとってはしゃくに障ったらしい。怒りの表情を浮かべ、涙は乾いていった。

つり目をさらにつりあげて、海斗のほうへと一步踏み出したその時、いつも渡会とつるんでいる加藤が駆け込む。

「おい、渡会！ やめろって！ 鈴木は何も悪くないだろ」

「うるっせーよ！ わかってるけど、許せねーんだよ！」

二人のもみ合いに、海斗が目を丸くする。

海斗の知らないところで、何かあったらしいのだが、皆目見当もつかない。

ひたすらに困惑していると、渡会がじろりとにらんだ。その瞳には剣呑な光が宿っている。

「友達のフリしてるみたいだけどな、皆知ってるんだぞ」

「何を、だよ」

押され気味にたじろいで、海斗はそれでも負けじと声を出せた。

加藤が少し慌てた様子で、渡会を引き離そうとしたが、彼は振り払って海斗に近づく。

「マジで知らねーのかよ。佐々木が日下のこと好きだって」

思ってもみなかった衝撃に、海斗は思考が混乱した。

そんな事、微塵も思った事がなかった。内緒にしていたというのだろうか？ あの葉が？

しかして、あり得ると頭の片隅で肯定する自分もいる。

動きを止めた海斗に、渡会は声をあげて笑った。

「マジ知らねーんだ！ どう見たってそうだろ。日下だって賭けとか言って、佐々木にちよっかいかけてるだろ？ わかんねー奴のがバカだろ」

「それは、ボクにだって……」

「はあ！？ おまえが先に告ったりしたからだろ！ 友達なら言え

なくなるに決まってんじゃないか。あいつら、本当は両想いなんじゃない？」

たたみかけてくる渡会の言葉に、海斗は身動きが出来なかった。もういいだろ。と、気まずそうに引っ張っていく加藤たちを、見送る事も出来ない。

毒々しいほどの夕焼けに包まれ、広いはずの教室は急速に狭まる気がして。

海斗は息苦しさに、二人を待たず、その場から逃げ出した。

途中、誰かに声をかけられたような気がしたが、そんな余裕などあるはずもない。

おそらく通常の帰り道を走ってきたのだろうが、どこをどう走ったかなど覚えてもない。

気がついたら、自分の部屋だった。

いつから？ 自分のせい？ などと、取り留めのない事くらいしか思い浮かばない。

「おい、海斗。いるか？」

閉め切られた扉の向こうで、大学受験に忙しいはずの兄、陸が声をかけてくる。

いないはずなのに。そう思った瞬間、現実に戻された気がした。

「開けるぞー。勝手に」

そう付け加えて、海斗の声も待たずに扉を開け、眉をひそめた。電気もつけていない暗闇の中、隠れるように布団にもぐりこんでいる弟をみつけ、困ったように前髪を触る。

「早く下に行かないと、飯抜きになるぞ」

「……」

気を使っている時の声だと、海斗は気づいたが顔を出せなかった。渡会の言った『皆知ってる』という言葉に、陸が入っていないわ

けない。

聞きたかった。自分以外の皆が、葉の気持ちに気がついているのか。そして……

いや、そんな事。まだ桜の事が好きな海斗が、聞けるはずもなくて。

「おい、聞いているのかよ！」

いい加減じれてきた陸が、海斗のベッドをけつとばしてくる。

次に来るべき兄のエルボーに耐えるべく、少し身をよじらせたが、ただ大きいため息をついて腰かけてきただけだった。

「ったく、話してみろ。誰にも秘密にしといてやるから」

「……言えるわけねーじゃん」

「日下さんの事か。お前、ふられたんだろ？」

本日二度目のエグリに、海斗はさすがに頭を抱えた。

普通に見えていたとしても、少しは傷ついていたのだ。

びくりとした布団の動きに、陸は肩をすくめる。

「それでもちゃんと友達でいられるって事は、脈がないわけじゃないだろーが」

「……兄ちゃん」

もう少しだけからかおうかと思ったが、そんな雰囲気でもなく。

海斗が話始めるまで、黙って待つ。

たつぷりと時間をとられ、さすがに陸が布団を引きはがそうかと思つた矢先に、海斗がつぶやいた。

「何か、何か気がついた事ってないかな」

海斗のせいっぱいなのだろう。

そう受け止め、陸の脳みそは目まぐるしいスピードで答えを探した。

日下さんと海斗の間で気がついた事？

いつの間にか四人組に増えていた彼らの間には、特に目立つ点はなかった。

「そう、だな。どちらかと言えば、日下さんは……」

「やっぱいい！」

「はあ？ お前、オレに聞いたって『やっぱいい』って何だ！」

苛立った陸が、丸まっている海斗を布団の上から踏んづけた。
グエツと言う声を聞いて、さらに体重をかける。

「どうだ。兄ちゃんの言う事は、聞いたくもんだぞ？」

「いらねーって、言ってるじゃんか！」

「あー、日下さんはー」

その状態のまま、面白がって続ける陸に、海斗はアーだのワーだのと大声をあげた。

「どう見ても、オレの事が好きだろう」

陸の足の下で暴れていた弟の動きが、ぴたりと止まる。

あきれたように鼻を鳴らして、陸は足をどけた。

「わかったら、飯だ。母さんの飯を拒否したら、明日の朝飯もないぞ」

電気をつけるでもなく、扉を開け放したまま陸は階下へとおりていった。

布団から顔を出して、灰色に染まった天井をぼんやりとながめる。

どうして忘れていたのだろう。

そうだった。一番の敵は他でもない、身内にいたのに。

「そっか、渡会は桜が兄ちゃんをつて、知らなかったっけ」

ひどく重く感じる体を起こし、何を思うでもなく窓の外を見た。
逃げ帰ってしまった。

もし葉が桜を好きで、海斗に遠慮して言えなかったのだとしたら。
「聞かなきゃいけないんだ。友達として」

決意というよりは、吹けばはかなく消えそうな気持ちに、また力が抜け落ちる。

ぼんやりとしていたら、母が音を立てて階段をのぼってきた。

「海斗！ ご飯だって言ってるでしょ。恋わずらいなんて、寝てても治らないんだから、ご飯食べてから考えなさい！」

母の言葉に、海斗は口をあんぐりとあけた。

なかなか下にいかなかったからとしても、バラすとは何事か。

「恋わずらいなんかじゃないよ！」

思わず響きわたるほどの大声を出せば、階下で笑い声があがった。布団から飛び出して、怒り心頭なまま、海斗は階段を転がるように駆け下りていった。

——晴れ渡る秋の空。

昼間はまだ暑かったりもするのだが、海斗の脳みそは煮えそうだった。

「どう言えば……」

「何を？」

海斗の背後は、そんなに隙が多いのだろうか。

ひよっこりとのぞき込んでくる桜に、海斗は思わず飛び上がった。

「何が！」

「だから、大声出すの気をつけようよ」

「ご、ごめん」

桜にも聞いたほうがいいのだろうか。

きつちりと三つ編みにした長髪の彼女を横目で見たが、切り出す気になれない。

万が一にも、また陸が好きだと言われたら——さすがに連日ともなれば、シヨックは倍増されるに違いない。

「で？ 誰に何を言おうとしてたの？」

「え？ 別に何でもないけど」

とりあえず彼女から視線をはずして、のっぺりとしたコンクリートの土手へと目を向ける。

そこには、葉がいつの間にか並んでいた。

「うわっ！ 葉！」

「はよーっす。って、なんだよその反応。ちょっと失礼じゃね？」

「声くらいかけろよ。驚くに決まってるじゃんか」

実際、心臓が口から飛び出るかと思ったほどだった。

「で？ 何を悩んでるって？」

「……なんでも、ないって」

たとえ本人にだって聞きにくいものはある。海斗はため息をつき、前髪を触った。

そんな彼に気づかれないよう、無言で桜と葉が目配せする。

「海斗。友達って何のためにいるか知ってるか？ 誰にも言えない悩みを相談出来る、信頼出来る人間を言うんだぜ」

「じゃあ、葉はどうなんだよ」

「は？ ぼく？」

鼻高々に、おそらくどこかからの受け売りだろう言葉を投げかけてくる、たれ目の彼だったが、疑うように見てくる海斗に目を丸くした。

桜がいる状況で、こんな事を聞くのは卑怯だと気がつき、海斗はうつむいて。

中学校まで、やっぱり逃げるように走りこんだ。

追いかけてこない二人に、少しだけ安堵して。少しだけ後悔して。たどりついた下駄箱で、海斗は一人深いため息をついた。

＊

その日は、何をやってもダメな一日だった。

いつだって完璧な一日なんて、あるわけがないのだが。

おかしな海斗を気にして、アレコレとちよつかいをかけてくる桜と葉を見ては、その息の合う様子に、さらに落ち込んでいく。

「海斗。お前、いい加減にしろよ」

「な、何をだよ」

さりげなく二人を避ける海斗をトイレで捕まえ、あからさまに不機嫌な顔をした葉が詰め寄った。

覚えがあるぶん、いたたまれなくて。海斗は彼から目をそらす。

「何があっただよ。いつもおかしいけど、今日は特におかしいじゃない」

「そうでもないよ。いつもこうだろ」

「いいや！ 海斗なら『いつもおかしいってなんだよ！』とかって大声張り上げてるとこだろー？」

いつになく真剣な葉に、前髪を一束触って動揺した。

今が聞くタイミングなのかもしれない。

歯を食いしばって、勢いよく顔をあげれば、渡会と加藤がトイレに入ってくるのが目に入る。

なけなしの勇氣は、あっという間にしぼんだ。

「……なんでもねーって」

彼らと入れ違いにトイレから飛び出した海斗を、葉が逃がすわけもなく、すぐさま後を追ってくる。

足の速さで、勝てるわけがなかった。

ひよろっとした葉だが、体力も腕力も、わずかながらだが伸長も海斗よりも勝っている。

それでも必死に走った海斗は、桜に告白した渡り廊下で足を止めた。

突撃とばかりに、背中を突き飛ばされ、海斗はたたらを踏んだが持ちこたえることに成功。

「ったく！ 葉様から逃げられると思うなよ！」

「逃げようって思いは……少しはあったけどさ」

「だろうな。って何？ ひょっとして誘い込まれたとか言わないよな」

慎重に辺りをうかがいだす葉に、海斗はやっと吹き出した。

「誰にだよ！ 違うよ。葉に、聞かなきゃいけない事があるんだ」

「なんだよ。金は貸せないぞ？」

「違うって！」

葉のとぼけた顔に、いくぶん和んだ海斗は意を決して顔を上げる。ファイティングポーズで、片足まであげて応戦しようとしている葉に、少しだけ呆れた視線になりつつも、つばを飲み込んだ。

「葉は、桜が好きなのか？」

遠くから、生徒たちの笑い声やボールの音が聞こえてくる。

部活はすでに始まっている時間だ。

いまさら将棋部に遅れていようとも、海斗にとってそんな事は二の次だった。

渡り廊下に吹き抜けていく風は、強く冷たい。

それよりも、葉のわずかな表情の変化が重要だった。

きょんとした顔から、眉間にしわが寄り、さも嫌そうに口がねじまる。

「前にも言わなかったっけ？ そりゃ嫌いかじゃないけどさ、海斗と同じ好きってのはねーよ」

「友達だろ？ 本音を言えよ」

「本音だって！ じゃあ、なんて言えば信じるんだよ。今ボクが絶対違うって言っても信用しないんだろ？」

多少、怒りをこめて言ってくる葉に、海斗は素直に謝った。

柔らかかそうな短髪をかき乱しながら、葉がしょうがねえなため息まじりに舌打ちをする。

「で？ 誰からの入れ知恵だよ。ぼくたちを陥れようなんて最低な奴はよ？」

「だ、誰でもいいだろ。それは関係ない」

「あるだろー！ 海斗は特にすぐ人を信用するからなー。わかって吹き込むなんて、悪質だ！」

「……ちょっと待てよ、そんなにボクってわかりやすいのかよ」

半眼で、不服とばかりに唇をとがらせれば、葉は目を大きく見開いた。

「そんなもん、あたりまえだろ」

「だけど……葉と桜が、両想いだって。皆そうだと思ってるって言うてたぜ」

「はああっ!？」

これ以上あかないだろうという所まで口をあけた。こんな親友の顔は、あまり見られない物で。

珍しいモノを見るまなざしを向けられた葉は、逃がさないように海斗の細い肩をつかんで笑顔を作った。

「……海斗くん？ 誰だ、そんなない事ない事言いふらしてんのはよ」

「いたたっ！ 何しても言わねーぞ！」

どうしても口を割らない海斗から手を離し、舌打ちをして。吹き巻く風をさけようと振り返る。

葉が、動きを止めた。

尋常ではないその動きに、海斗が彼の後ろから顔を出せば、おそらく二人とも同じ表情で固まった。

「さて、将棋部諸君。さぼった後輩を、どうしたらいいと思う？」

含み笑いたっぷりの藤本部長を先頭に、将棋部員勢ぞろいしている。真樹まで申し訳なさそうに混ざっていた。

「……どこ、から？」

うめくように海斗が声を出せば、藤本部長と河合副部長がお互いに目配せをした。

「あれだな。我ながら足が速いと痛感した」

「ああ、確実に間に合った。しかし知らなかったな、佐々木が……」
河合の言葉に、葉と海斗が慌てて意味のない大声を張り上げた。

「全部じゃないですかっ！」

「あたりまえだろう。オレの足の速さを、なめるなよ」

「なめたくもねーけど」

海斗がため息をつきながら、うめく。

いつものなにかたくらんでいる笑い方をした藤本に、二人はたじろいだ。

「さて、鈴木海斗くん。だました相手は誰だ？」

「……別に、そんな事関係ないじゃないですか」

「いいや。話の内容を考えてみれば、いじめともとれるじゃないか。
生徒会長ともなれば、聞かなかった事にはできないね」

たたんだ扇子をつきつけてくる藤本に、どこをどうとれば、そうなるのかと海斗は目を丸くした。

面白半分だろうけど一理ある、と声を出した葉にも、驚きを隠せない。

「ちょ、ちょっと待てよ……あ、待ってください、だった。飛躍しすぎだって！ なにもそんな状況じゃなかったと思うし」

「どんな状況だったんだよ」

じろりと見てくるたれ目を真剣に見返し、海斗は頭の中でその時の状況を思い浮かべる。

渡会は、泣いていたのだ。しゃくりあげる事はなかったが、自分を見て、驚いていた。

そしてその顔が、徐々に怒りに変わっていく。

八つ当たりするように、まっすぐその怒りをぶつけてきた。まるで、すべて海斗が悪いと言うように。

「そうだ。なんでだ？ 渡会は八つ当たりっぽかったんだ」

「……渡会。あいつか！ そういえばさっき、トイレで一緒になっ

てたな。ひょっとして、それで逃げたのか？」

顔をしかめた友人に、海斗はしまったと慌て出す。

困惑した様子の真樹に気がついた河合が、彼女を輪の中から連れ出したが、これからの内容を知られないようにとでも踏んだのか、藤本は止める事はない。

だんだんと大きくなる海斗の声。

「そ、そうだけど。そうじゃないよ！ 葉が言いづらいなら、絶対に誰もいないところで聞かなきゃって思ったからで」

「けっきょく部長に聞かれてれば、世話ないけどな」

「だな」

今日一番の大きなため息をついて、海斗はなんだかすべてをあきらめた。

話がついた事を見届けて、藤本が左手に扇子を打ちつける。

「まとまったようだな。それで？」

「それでって、もう用事は済んだんですけど」

輝かんばかりのまなざしを向けられて、海斗は口をとがらせた。

また始まったと肩をすくめたが、きつと面白い事になると踏んだ部員たちは部室に戻る事はない。

「いいや、済んでないはずだ。特にその渡会一義くんにとってはね」
楽しくてしかたがないのだろう藤本は、切れ長の目を細めて笑顔を作る。

あからさまに怪しい笑顔だった――

――だからって、こんな事になろうとは。

体育大会たった中、さんさんと降りそそぐ陽射しの中、海斗は真反対に暗く沈んでいた。

徒競走のため、しかたなく移動はしている。だが競技があるたびに、ため息しか出ないのだ。

「海斗！ 今度の徒競走くらいは負けるなよ」

「……本当は葉だって巻き込まれてるはずなのに。気楽でいいよな

」

「しょうがねーだろ？　ボクって出来る子だからさ」
陽に焼けて赤くなっている鼻の頭を小さくかいて、葉は歯を見せ
て笑う。

藤本の提案はこうだった。

「体育大会で少しだけ『細工』をしてやる。だから奴に勝て！」

思い出しても頭が痛くなりそうだった。海斗は少しでも忘れたく
て、もう一度頭を振る。

目に入ったテントには、生徒会長の藤本と河合の姿。確実に目が
合った。

勝てよ！　とでも言っているのだろう。口は動いていないが、こ
ちらに見えるよう、小さく右手をにぎりしめてきた。

「まったく、どんな手を使ったんだよ」

「ほんとだよなー。ボクラ三人、ずっと同じだぜ？」

葉がさすがにあきれた声を出す。

海斗、葉。そして渡会の三人は、同じクラスで背の順も違うにも
かわらず、競争を強いられていた。

もちろん一番理解出来なかったのは、渡会だったろうが。

だがまだ海斗は、渡会に一度も勝ててはいないのだ。あと残って
いる競技としては、徒競走と騎馬戦だ。ということは、この徒競走
が最後だろう。いくらなんでも騎馬戦で同じ白組同士では戦えまい。

また一つ、海斗はため息を吐く。

「いい加減、あきらめたほうがいいぞ。どうせ先輩達にはさからえ
ないんだからさ」

「……そうだな」

三人プラス別クラスの三人が位置につき――葉が一着、渡会が三

着。海斗は四着という結果に終わった。アイスのおごりは決定だ。

そして、渡会が意外と運動が出来る事を知った。負けで終わりで、海斗はやっと安堵のため息。

「やっと終わった」

「けっきょく勝てなかったか」

葉が肩をすくめテントを見れば、つまらなそうに目を細めた男が二人。

「あとが怖そうじゃね？」

「……しょうがないじゃん。そうだよ、ボクは頑張ったんだからさ」
「どうすんだよ」

「どうとでもなるよ。問題は部長達じゃないんだからさ」

ひよろりとした葉が、眉をひそめる。海斗は一人うなずき、行動に移す事を決めた。

騎馬戦では、白組大将に藤本が据えられ、こっそり同士討ちしろと言われたが、さすがに拒否をした。いくら入り乱れているからとて、出来るはずがないだろう。

馬になっている葉はともかく、残り二人になんて説明したらいいというのか。

無事にかどうかはともかく、競技は終了して。

海斗は渡会を、すでに定番となってしまった渡り廊下呼び出した。加藤もついでに声をかけて。

二人とも、気まずそうではあった。顔は日焼けで赤くなり、少し疲労が見えている。

「なんで呼ばれたかくらいは、わかってるよ」

どう切り出せばいいのかと、思案していたが、重そうに口を開いたのは加藤だった。

ふてくされた顔をした渡会は、海斗を見ようもしない。

「そっか。じゃあ言わせてもらうけど、葉とはもう話し合ったよ」

「本人、目の前にしたら。本当の事なんて言えねーだろ」

あくまで視線を合わせようとしないうちに、少しだけ前髪を触って苦笑した。

「本当ってなんだ？ 葉が言うのなら、ボクは信じる」

「うわ、それで本当に友達だって言えるのかよ」

「言えるに決まってるだろ。それにもし、葉が本当に桜が好きだとしても、ボクは……負けない。だって、ボクだって桜が好きなんだからな」

視線を外す事もなく、敢然と立ち向かってきた海斗に、加藤は横目で黙りこくった彼を見ながら謝罪した。

「鈴木、ごめんな。その……こいつ、あの時ふられたばっかでさ」

つり目をさらにつり上げて、加藤をにらみつけたが、ただ申し訳なさそうな顔をしただけで続ける。

「いい加減、八つ当たりはやめろよ。まったくじゃないけど、鈴木は知らねーだろ」

「うるっせー！ 知らないからってなんだよ！」

「うるさいのは、お前だろ！」

おもわず叫んだ渡会よりも、さらに大きな声を張り上げた。渡り廊下に、その声が通り抜けていく。

「大声なら、負けねーぞ。それより、ボクの知らない事ってなんだよ。今逃げても、毎日ずっと聞くからな。教室でも、どこでもついて回ってやる」

「……南川だよ」

しばらく出すように、渡会は声を出した。だが、それっきり黙りこんでしまう。

「真樹？」

「そう、南川に告ってさ。ふられたんだよ」

「で、なんでボク？ 真樹について回ってるのって、ボクじゃなくて葉な気がするんだけど」

声を低くして、不服とばかりに口をとがらせる。

日焼けで肌がつつばるせいか、加藤は顔をこすりながら肩をすくめた。

「それがさ、好きな奴がいるって。それがうちのクラスの鈴木だって言うから、こいつ荒れたんだよ」

あんぐりと、口を開けるしかなかった。

知らないとした、言いようがない。そんな素振りは見せていないはずだ。海斗がいくら桜しか見えていなかったとしても。

「そんな……」

「違うの！」

なんとも答えづらい内容に、それでも何か返さねばと口を開けば、渡会たちの背後から真樹が声をあげた。

慌てて振り返る二人に、真樹が立ち尽くしている。

「ごめんなさい！ 途中で行っちゃったから、きっと誤解してると思ってたんだけど」

「真樹、どういう事だよ」

「私が、好き……って言ったのは、海斗君じゃないの」

「はあ？ うちのクラスで鈴木って言ったら、こいつしかいねーじゃん」

食ってかかったのは、渡会だった。

悪ぶっているとはいえ、好きな女にはさすがに手は出せないのだろう。

ただ彼女に詰め寄って、まくし立てようとするのを、加藤が止めた。

「南川、意味わかんねーんだけど」

「うん。だから、海斗君じゃなくてね？」

すまなそうに海斗を見た事から、とてつもなく嫌な予感はいした。

しかし耳をふさぐ前に、その言葉は吐き出されてしまった。

「私、私は。海斗君のお兄さんが好きなの！」

目の前が、真っ暗になりそうだった。

別に、真樹の事が好きとか、彼女にしたいとか思っていたわけではないはずなのに、この打ちのめされた感はどうなのか。

卒倒する前に、とりあえず頭を抱えてしゃがみこむ事には成功した。

「……鈴木」

「何を言われても、困る」

うらめしそうににらんでくる二人に、海斗はそう返すしかなかったのだ。

「海斗君には、本当に関係ない事だから。それに、私だって片思いだし」

「南川、だって？」

頭の中が、ひどく混乱しているのだろう。そう、以前の海斗のよう

に。あえぐように声を出した渡会が聞けば、彼女は深くうなずいた。

「桜も、そうなの」

何度も聞きたくはなかった。

そして、今度はあからさまな同情の目が、海斗へと降りそそがれる。

そんな二人をにらみつけるように見上げ、立ち上がり、交互に指差した。

「だから！ ボクは負けないって言っただろ！ 兄ちゃんより、ボクのほうがずっと長く、同じ時間を共有出来るんだ」

だから！ と言いながら、語尾がすばまる。

真樹の後ろから、葉そして藤本や河合の姿が見え隠れしたのだ。

葉以外は、皆。

全部、知っていたのかもしれない。

そうだ。皆に見つかった時、河合副部長が真樹を遠ざけていた。なるべく知られたくない内容だったから、気にもとめなかったのだが、全部知った上での行動なら――

そう思った途端、怒りがこみ上げてきた。

負けない。そうだ、負けてなるものか。

もうすでに、誰に向かってなのかはわからなくなってきた。

「絶対！ 負けねーからな！」

二人が目丸くするのも構わず、吹き卷く風に負ける事なく。

海斗は、今までにないくらいの大声を張り上げた。

(後書き)

時間シリーズ5作目です。

読んでくださって、本当にありがとうございます！

いつでも不調なのですが、もっと頑張っていきます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9328g/>

反復する時間

2010年10月8日14時58分発行